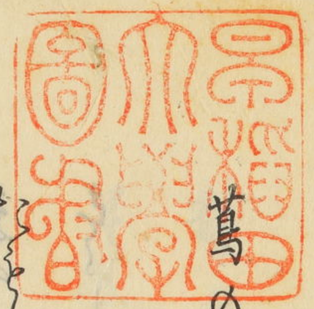
へ 5
4417
2

門 へ.5
號 4417
卷 2

昭和九年
九月二五日
購求



蔦のもと秋之部

立秋

はつあきのあさ露深しやとの蛙

文月や出家ともなく蟬くれば

磬の音社もしらぬ秋のつ

三日月の入るの雲や扇ぎく

七夕

星の胡せきしと見えぬ草葉かな
蜩もよ初秋あたりむしも宵
妻かしまなのあれてしや火とり虫
隆辰菩面にかかる席上にさそはれ
ともかりしは宵をとしむ
新人とて七葉の梶を出さましし
きくしとて星のしはくや清に髪
一つ降てん銀河のこぼれとまるらん
うちからつ小町が戯る

龍のあかりてきかいかるの星
星合うさまをあしたの露はしろき
八日の朝のつゆなんしと志て好鶴に
こかれちりし女子さくらいとうらう
與風ふくよむさえ涼しかしの歌
はつきもそらちと波うや盃用る
いとけなかりし昔を失ひし紅年

人列る　雀ハ山ゝ重の雪
草売る家ゝ書籍や数の色
花のよゝしも多れあて
六まやらの　盆供ゆゝ都もの
むしろ積藁ゝ　住もも　父まゝれ
迎火や裏家脊戸家ゝ　子の多ゝ
ゝあゝ家ゝむしろ火　人ゝ　峰雨ゝ
盆ゝ　や彩色印ゝ　ゆゝ社まゝ

娘ゝまゝ書ゝ　ゝて書ゝ
日本武の事ゝ
奉ゝて住ゝ　ゝ家ゝ感
聖火留社　青の峰ゝる　孫杉ゝ

稲書

い家書や　出根蔭ゝ　百まつ
稲つまや　雑もて余ん中ゝ
稲書や　弱ゝ堂ハ人の中

いかつるや揖斐の里には
稲妻やすさ庭にある迷う花

露

いつとても秋こそ露の林
走るこそやみ人ぞ孤ん
走るこそ芳野こそ美人や牡の露
夕べやや草もぬるる露の玉

峰の月の中ゆもをしや秋の露
晴の余りうかるて感ぜ陶ぜ寄る片手社
何の つるきゆふ ふおあそ強ちよ
のくくあしあ屋さうハ

下露やうれハ夜峰の月の秋
毎況上人をしむ

野露の佛ぞ睦ぞ計て
月色の露ハ動ぞ社ぬるぞ

七夕も来あはでやちる木槿哉

人亦郎和よんを入るの作試さんと
大原の草麿ゝせ乞よ

百年社木綿よ也色ちる木槿

脊戸の秋至ちるの七ゝ葉葉

ちる柳芦も積せの住ゝゝ

蕣

野ゝ日も日毎ハさゝ絲陸形戸

蕣ゝすゝかや夢油のもとを雲篭

胡良よ世の月ゝをて歩ゝ戸世

京関よ夏雲立あと

野ゝ日よ雲もををん秋雲夜

世蕣よをを

秋をゝゝ芒ゝ芒ゝ歩ゝ山の草

[illegible]

注[illegible]屋花[illegible]

日[illegible]日[illegible]寺の屋花[illegible]

女郎花

[illegible]や[illegible]の[illegible]

意[illegible]や女[illegible]花

吉[illegible]嬬[illegible]女郎[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]

萩の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

小車やそゝぎ捨ける草の上
尼よりもあはれ人はれ草の花

虫

かゝ虫の中へ片寄る雁の皐
ゆゝしきものかゝる下枝きもゝ

五虫八方をもて先まつ中ゝ松虫鈴虫
のゝ遠へぬる八方世ゝあやまつるや

一聯 雨赴

移虫よかゝる草をきゝ
松虫よかゝる月よふくゝ雲ハせ
ゝ波きりぬ背ゝおもふさ鈴ゝか
月ゝも宮ゝをかまれかゝ光
芒刈ゝ中ゝの吉する鈴虫ゝ枝
情蛤の蠟をそゝるや舟の五器
義打つ屋毛きゝ知つ小鷹狩

さつ月や雪踏る人のうし波敷

月よさそ送るも夫の伊勢参り

月の雪はらハよろれる夜ゝ也

あるゝ哉ハ月のゝ雲を行れける

八十ま あるゝ命やいく度月

大原や月ゝ[illegible]ゝ家一ツ

泥む坊の面四睦のかゝ[illegible]

男ゝも妹ゝも[illegible]この月夜

雪の月ゝゝ波や祖仏の海

待宵雨祈禱

[illegible]や鯖も碧[illegible]

待宵や浦[illegible]の[illegible]せん

[illegible]の十五夜[illegible]

夜

[illegible]の月さてもをしまぬ光　この秋
名月や小ぬるこゝろ　白の秋
清月も新しく　[illegible]の峯
[illegible]のもしやさつうの家ぬ月見
看經のうし後[illegible]　やまの月
月見をよう[illegible]あき　竜[illegible]て

老[illegible]人よさ[illegible]八[illegible]ゆ[illegible]蕭然[illegible]
東壁よ渡酒中をうく
經[illegible]ん[illegible]月を看
[illegible]をあて八丈[illegible]の漏[illegible]て
この十時[illegible]八[illegible]の[illegible]人あ[illegible]
[illegible]秋や[illegible]の[illegible]
白[illegible]の[illegible]人[illegible]や
[illegible]の[illegible]
いう[illegible]人の[illegible]
十五夜を[illegible]秋の白

十六夜

山さとの雲吐のうき夜哉

十六夜や一雲もなし松ヶ浦

いさよひや走り出て古くらの

きつねや雪のあかり提灯

汁うけうるもの飯や世の秋

姫の暮紫雲火よりもなほ

小菊咲よ世の菊の咲ばかりを

うそうそや地蔵うそうそ越の嶺

糸瓜の秋ぶらぶらかる夜寒哉

寄りて後ろ暮雲目ばかり表をうれ

長崎の橋よ月もむ東をうを

甲斐歌うたうとて身をむせ夜をあかす

東雲の白むを見るにつけても

墓はうし傘の古袋つく夜寒さ

砧

唱なきハさぶるあれや小夜砧

河内路やはるつてたろうつ

古詩休あまたうたる心うつるよ

傍見あるやうなるあるけて夜うつ

乙女のけんそんなる雲花うか

すうる邪也蔵ハ枝ちかし

おてこうたる墓中うるく法華うう

芦の穂よ里殺九寸る雀う船

稗あしかり 俤や雪まく 水尚傳

夫蕎のうへまでも 数や弱の影子

ひやくしゃ地をとて 百や雲霞の花

唐うしし 鄙ふかせの 雲の俤

坊うるよりし 舞まくぬうこ 飯

黍の中 嘘 花しうう 誘う来る

抱へまくる 乃ちかうう 黍の出来

稗の穂 うたの数 乃ちの 家

二世安楽 まる 生る 数小寺の

鄙 ちう あうう

市 佛の 肩 ちも 一把 稲 穂 秋

頃 湾 ちう さて 扇 ちう 秋田 ちう

早稲の穂や 雀 ちう 坊う 作

ちう稲の 多や 蜻 ちも 眠 ちう さて 扇 ちう

[illegible]

稲[illegible]

棄山子

[illegible]棄山子[illegible]立も山の白

[illegible]棄山子[illegible]の山雲[illegible]久しく山そ

[illegible]や門[illegible]立[illegible]

白の雲棄山子袖をかはし

時子里子兼子尹子

山[illegible]やとゝの呼子のもゝ雀

[illegible]の[illegible]に用[illegible]を[illegible]

[illegible]

雲竜寺白の雲人よゝの呼子

人の[illegible]棄[illegible]山の引板

雀

童繪のくまなきかけうつる麻の葉
紅葉ふむ麻ハ雲さへ鳴てゆく
蕎の花月にうつる澄夜哉
小畑に麻の香しるし中唐うら

雁

ゆくや星の消るもあるは日は
霧の中なあハきうつるや唐の雲

雨つゝ唐ハ紅葉も雨夜哉
うつゝやうの時を加へ雁あハ雨は
唐崎や雨ふる水も清しうつ
うつゝ雁雲ハ腹さしく鶏の時
鶏の雲の後の美夢を鄙ふまる
鶏鳴の雲さゆて雲や霧の後

時雨をかこちむらもあはれをも
立時雨ふるまろ小家のうしろ波を
餞する馬の音おやかく鄙
后月
生野の命ちかへ坂の月
坂の月山里ちかく落ちろ
本陸をかうすすろ十三夜

坂の月片毋持し古波ぶ
行方を主としてはるる夫を
十三夜やみ孫をあるを懐ふ窓
時雨をきれ〳〵中はかう
后の月波や二人ろ寂視

日宰の坊系つくるを志すして南
京を家伝あるを伝あるを家を
乃心の言れハうの仲秋の月みもいてお
をはんと河波の竹史ろ掛るる

外市を書て注しう五郎左衛

長月の朽や小松も霜うはく

京ゑ戸の口ゑて蛸の正

一翁上人のうやぢう

まねうれを爲て

炭をく水も枯まむ苦のうへ

蛸の口や柿喰ふて後の屁ろ

さらさらさやと蟬を出る山の白

彩日はさまま枯あらていつ春

うまうまうれ人

耳ふはく草鞋の雪や蛸の雨

撥撥の蛸を弄ふる蛸の白

菊

彩を北山ゑや菓の癒を日

冬まやや菊咲ようの淫世ろ

莫嘆野店無者接
博酒堪沽豆莢肥

不[illegible]や菓の日和を望みて
[illegible]の[illegible]に[illegible]の魂
萩[illegible]に活あきられし菓の花
菊の[illegible]にあらめてや月夜さし
小[illegible]の[illegible]日[illegible]推[illegible]と
[illegible]菓に[illegible]十日[illegible]

碩布の山行五

小ハ多社いく孫芋や求くの花
やさうハ蟲皆の獣をつれてま
るく小さ紀箱の蓋母の板を串の
[illegible]はしこ[illegible]豆をく山畑
みく[illegible]やき老め是あり

焼帛ハ法る菓も[illegible]少

白雲や[illegible]き求の菊
みちのくの百姫惆一[illegible]の芙蓉を
[illegible]白川の関如[illegible]

て長月九日のよとて紀貫之ハ
とゝ[illegible]
うちふきて菊さくを霧たるとも

紅葉

傳教のめてゝ見ゆる五葉哉
まゝ成しやあ葉を深き雲の色
さてゝぬ人も[illegible]てゝ柿五葉

振る敷も雲[illegible]瘦るや小坂越
小坂越ハ常田の金山を左ゝ出ねの玉へ越く
一条の紅葉ゝ乙二うほゝ柿ゝ五葉ちゝとて敷

桜
[illegible]ゝ葉ゝ[illegible]や雪の宿
[illegible]雪て物振ゝ[illegible]ぬ下ゝ雪
ゝゝ柿や木ゝ[illegible]ゝ濱の町
むゝ[illegible]ゝ小[illegible]ゝ今又雪ゝ
清[illegible]ん 物ゝ小ゝ清ゝ門の柿

刈あとの世葉もろむや山の栗
さらさやぬ蘭のうさぬ寝ぬまさ

行秋

り蛤や松葉ちらしを手持ぶで
ゆく秋や略の羽根繰くいくと
半蔵よ尺る舟もけりけり 秋暮る
はらもてもおろろ重ろう 越の秋

人ろ記年ろも宵ろ余ろ九ろろ
寒ろられるろ長経の歌もおぼえ
おきろ重るろ石陵ろ表れろる
よろ人ろ凡ろろけろ

蟬も死ぬ 蟬の死や九月空

人ろを海のろ夕人夜の掘ろ少
ろほろけの十七年ろ品ろ今ろも
孫のろ人教ちぬハけろ童の幻ま
おろろろれさろれた

さ気やろさ 酒ハろ白雄来

葛のもとに冬之部

時雨

麦屑の畔もちらるる走られる雨

あゞ敷の宮も墨染も ふる時雨

走られる夜と雨ひとを嵐の子

本願寺八走られも夜るの方走られ

法白の雲 探さるゝと云かゝけの

阿弓をちろこ級

[illegible]すまをも付箋の詠のかくまを

灯もおかすとよくとゝ[illegible]る事や作無月

霜

霜うれや生姜も植てある山屋

霜の立たゝる家も色ぶく

走もの蓼浦山しるもおかうきを案

越の玉ふくを

霜霜やは雇出さるゝ紙五十

霜の廿号ゝまて蕎をうゝめる

花笑さて[illegible]笑ふも霜廻

いろ〳〵ハ秩父の國と書るゝ陸こと

花ゝをとゝ走ゝれゝ公私の不動空

山家地若干多く便ゝませ力ゝ

ゝ多〳〵ゝまゝかゝと刈ゝるをゝ紅山

ゝゝさて人月も草もよゝ知ゝ乃穂

山屋のいゝふもさゝ

おく〳〵霜や唐木おゝ多 称山

[illegible]も[illegible]の[illegible]根のさらし雲

野[illegible]を[illegible]小春[illegible]

芋の[illegible]

こくしや雪水[illegible]草鞋[illegible]

寺建る煙のうゑや[illegible]日[illegible]

[illegible]富士の[illegible]

[illegible]月[illegible]

[illegible]の月[illegible]の下[illegible]

[illegible]すゝ[illegible]の月

月も[illegible]十夜[illegible]の脊中法[illegible]

忡童[illegible]實[illegible]

[illegible]や[illegible]連[illegible]て[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

金[illegible]

[illegible]

小千谷由都留亭時雨會百負差題

[illegible]

[illegible]

人も合器[illegible]納[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

玉河 老人の古を利る

[illegible]

男めう[illegible]

[illegible]

押[illegible]

[illegible]

よしたつのよ法を亜能と如し之定
めていよき藤梅の指をしまつる孫
き画る人さまして中法るハ見る
寄の称なり

楷のはよく嫌きよう　おりよ気を
楷よ戻し　旅人　猩あり　あらし
冬を傍まよ山　龜のうよ　手紫まる
画　歴よ知らて　大樋ハ　せさ生し
艸庵の　家傍を旋きと附

巨旋らう麻手ゆくさへもつくれど
あゆしこし　蝮膠を家も　枳式なり
川をこる越る佃富おりて張家の喜れ侍る
よ江戸楷のものきすよる地もあしれは
今年は　斬も　まゆる　牌　ゆる
旧　傍よし　の　社まて
侍そさや　雰夜の　姫を　耻中
雰夜なん　刀自の　神儀　葉ろさ

麻露竜うは年の春を
祝ふてうた

雪云ニツ赤と負しと為を経し
うちの岩ハ六ツも七ツも嘯年
ちやうさたるよ

うゝ古き系を思ふう 時の春
雪衣ん冨ふ式紙を書ふ
蕭然たてふやいふてる持仏堂

歳暮てふ史ふけし 月はゞ
ちゝ火 箸箱ふ冬ふれも 雪の歌

日の出ふ松 波浪も色ふ 不磨の花
小天羅宵城波筆の調を史んと
云加賀の芽谷ふ

ふ蒙ふ 史馬すふや 枇杷の花
墨田川よ書しある家を志れて皆金ふ
茅丘ふる浦人ふ亭よ 仮粧をいとも

[illegible]山花を折りて凡夫の伸
[illegible]ちくもとえよ手まや　古来未
[illegible]人[illegible]れ　枯尾花
水[illegible]凡夫
枯黄やはなを少を呼まら
業[illegible]や　仏の世も一[illegible]け

さ[illegible]の[illegible]
筆[illegible]
[illegible]
枯あしや[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
鼻も　拍[illegible]の　伸[illegible]く

ちハとてあまも枯ちうれかしハ
天童の喧嘩をきゆるうれ世ぶ
宮瀑の下るし信濃川最上一の
急流ちうや
宮瀑や水よ長れうて花木の紫
本葉ちれたけちうれうも山鳴ちく
懐ちうあも茅ちて浪雪の屋葉さ
義信も義紫ちう行うれと

うさ清ちや 信州まもも山ちう屋葉
信濃雪を人芦毒等ちてちわく
上手ちふんと自ちあへちう
まれうの玉物ちうへし麦を落
ちうされや さて縁金の麦ちけ
義麦刈ちよ屋ちうれも滝のうへ
釋刈し信のち凡舞る山の麦

大の字も干さる粉や芋がら
拝かしの蕎刈跡よりまて烟
蕎麦一度ものぞく赤蜻蛉
鶏の往来しをくるる畑ずら
夕立や田の面の白さゆるを

夕立

水音も爾鉾さまいとふるしや

水音や入まくるる津久井縣
鶏ふくや雪もちも南さけ
夕立のあくるくるや夕の松く
警鶏よ西岳の時代乃夕立ん
小鶏ふも余仁くるや郭公
水音の鷹ふよ乗て数さむ汐ず

千鳥

[illegible]は八時の本業終りつる
鶏鳴も二三度なれば[illegible]
舟の雪[illegible]沖洲[illegible]
光[illegible]の[illegible]人よりあら[illegible]
猿も老つる[illegible]星のちらちら
[illegible]や藤[illegible]一人寝るわびし

[illegible]更[illegible]
義朝[illegible]
[illegible]
河豚の[illegible]
[illegible]
[illegible]や[illegible]の行

[illegible]

[illegible]

孫昌も扈從[illegible]

子孫[illegible]

孫宣殿[illegible]

[illegible]

[illegible]

定盛もさ[illegible]

雪

[illegible]

祢雪や宇治の小茶[illegible]釜

雪國の[illegible]

[illegible]

くさの雪刀根もとめて粉の帰る

雪のひやゆしき家のうきたち

雪ふりや鶴の目つゝを比そひき

埋ぶくやうきるあゝ浮世

雪のあるゝ紀氏くゝおく鶴

一茶ゝ清貧を尊とむ

麓とてハ梅の古葉を唐の雪

雪のひや鹿の幸通る 澄の町

豆ゝゝつくや唐も由義の雪

雪国ゝ大ゝの浮世かな

蕎雪ゝゝ浮世の物おもひ

傘ゝけさせゝ法師の濃よ

京町の雪ゝゝ神の雪

立寺や天井ゝゝ雪ふる里

伊勢の窓も孫庇の日比谷のたける雪

山里や雪さへ積れば霰降る

あられふる篠のまろ寝やふかいたさ

馬酔木忍ぶ毛もとろる枯野をてる鬼女の

井ハかしらふ尼ゆる

みそさゝや雪よあれる小笹原

山田の畔の枯すゝき刈人の

よめうもうふん

刈人もおそこ伏草よ多の百

多の面多ももしとゝあん

稗の穂さうは教ゆ哀

くさくさ岳明のよすゝ

雪風も小うの多人

打ても波とゝ孫多の梅

死ぬるを和尚ら頼ま[illegible]

[illegible]仏子の書おくるを[illegible]

老情

[illegible]人恋もるを[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

[illegible]餅の餞を養社燈

[illegible]用意

[illegible]の年[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]八重の千葉刻むあらハの[illegible]

[illegible]おろへ[illegible]水

[illegible]代ものの色尚を

[illegible]麥つく臼のうけは[illegible]

[illegible]

[illegible]れ[illegible]鬼追ひ[illegible]庭を[illegible]
[illegible]を除[illegible]日の俳諧[illegible]
[illegible]ノ旦坊主
鬼[illegible]も[illegible]人[illegible]の豆
[illegible]
[illegible]と云ふのほうふ[illegible]と唱へ給
[illegible]
小雲[illegible]てもゆるや年[illegible]
[illegible]
[illegible]年[illegible]ん

[illegible]
松の葉も[illegible]帰よあへて年[illegible]
梅[illegible]筆[illegible]富を[illegible]の年
[illegible]の夜やむ[illegible]今[illegible]樹の[illegible]

三國嶺三社権現法楽

赤堀なをおくりて先人なるの百首
ふりをぬ一奉る

月雪ふる庭ふる法をなを見せ中
深き人ひとりはなをいはいよ〳〵繁栄
寶まいらんなるを

鶯の巣をなを社まるも夫人なる
伝授の法仕ハはれの法をふ
まいらんと思あてるるみを

古ゆとも芝をぬ緒よくしませ

小石谷なを長岳へ送る中歌中詠れ
中ふるあるあ法の巣地師をを前田の
見人丹しむ

井ふ所なを流を井よ織の者

六人をを白ん三嬢——雪の皆

三の巣おなを
まなるなるを
小ちの法をを
ふ中ハふれを
法なるを
巣ふ前を
巣ハあれを

[illegible]

[illegible]

草夢もう夫草ゝ貧ゝ僅ゝと
いえども又一長物也

[illegible]

[illegible]

山[illegible]

人世莫為婦人身
百年苦樂因他人
[illegible]
すみを肝火のもゝ[illegible]一重物の

[illegible]

墨堤雪景　[illegible]

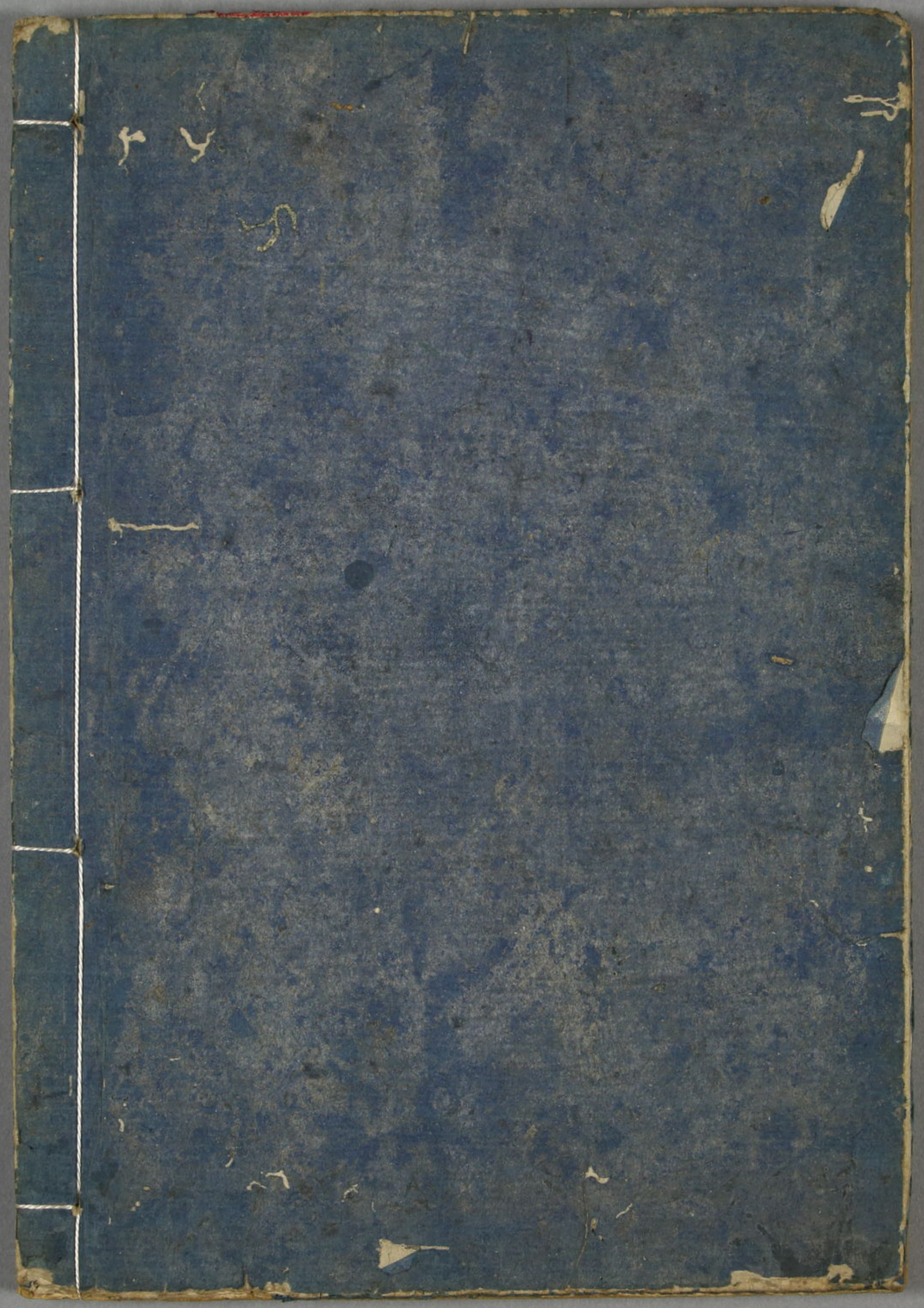
[illegible]

[illegible]

角田河四時

月のうちに花見や角田川

菊ちる百ふ[illegible]の八

三日月も見るあるも秋隅田川

月雪に[illegible]墨田川